



**Data** 2022-63

監督・脚本: チャン・イーモウ  
出演: チャン・イー/リウ・ハオツ  
ン/ファン・ウェイ

## 👁️👁️ みどころ

2008年の夏季北京五輪に続いて、2022年の冬季北京五輪の総監督を務めたチャン・イーモウの、映画作りでの近時の快進撃はすごい。朝鮮戦争を題材にした『狙撃手』(22年)の賛否は分かれるが、映画人の原点に帰帰し、中国版『ニュー・シネマ・パラダイス』とも言うべき、“フィルム愛”を全開させた本作は絶品!

“逃亡者”と“リウの娘”が展開する前半のフィルム争奪戦は興味深だし、“ファン電影”が指導する後半の上映会での大騒動もメチャ面白い。

時代は文化大革命。過酷な時代状況の下、最後に訪れる“ある幸せ”は、一人一人の目でしっかり確認したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■頑張ってるね、チャン・イーモウ監督! ■□■

1949年生まれのは、2022年1月26日に73歳になったが、①本来の弁護士業務の他、②ライフワークたる都市問題と都市法関係の実践と執筆、③映画評論家としての『SHOW HEY シネマルーム』の執筆と出版(何と、『シネマ1』から『シネマ50』まで50作!), ④『がんばったで31年! ナニワのオッチャン弁護士 評論・コラム集』(05年)に続き、『がんばったで40年! ナニワのオッチャン弁護士 評論・コラム集』(13年)、『がんばったで45年! ナニワのオッチャン弁護士 評論・コラム集』(19年)の出版、⑤中国語の勉強と中国関連活動の拡充、とさまざまな分野で頑張っている。

それと同じように(?)、1951年生まれのチャン・イーモウは、『紅いコーリャン(紅高粱)』(87年)、『シネマ5』72頁)で第3回ベルリン国際映画賞の金熊賞を受賞した後は、同期のチェン・カイコーと共に、第5世代を代表する映画監督として大活躍。以降の活躍は質量ともにすごい。2008年の北京夏季オリンピックの開会式および閉会式

の総監督に続く、2022年の北京冬季オリンピックの総監督は国家的大行事だが、映画監督としても①『菊豆』(90年)、『シネマ5』76頁)、『活きる』(94年)、『シネマ5』111頁)等の本格的問題提起作、②『HERO(英雄)』(02年)、『シネマ5』134頁)、『LOVERS(十面埋伏)』(04年)、『シネマ5』353頁)等のハリウッドを意識したド派手路線、そして、③『初恋のきた道(我的父親母親)』(99年)、『シネマ5』194頁)、『あの子を探して(一個都不能少)』(99年)、『シネマ5』188頁)、『至福のとき(幸福時光)』(02年)、『シネマ5』199頁)等の「これぞ中国映画!」と思わせるホンワカ路線の3つを並行させながら、幅広い活動を続けてきた。

そして、70歳を超えた彼の活動は、近時さらに加速し、ここわずか4年のうちに4本の新作を撮り、3本は中国で公開済み、1本が待機中らしい。公開済みが本作と『懸崖の上』(21年)、私が4月12日にオンライン鑑賞した『狙撃手(狙击手/SNIPERS)』(22年)、『シネマ50』200頁)の3本、『堅如盤石』(20年)が公開待機中だ。そんな状況下、日本でも本作が大公開!

## ■この男は誰?この女はナニ?フィルムの攻防戦は?■

本作の冒頭の舞台は、中国の小さな村。薄暗い中、建物の前に停めてある自転車の荷台に入っているフィルムの争奪戦がここそと始まるので、それに注目!その一方の主役は中年の男(チャン・イー)だが、もう一方の主役は薄汚れた14、5歳の子供(リウ・ハオツン)だ。

今ドキの人は映画用のフィルムがどんな大きさで、どんな形状をしているのかを知らないだろうが、イタリア映画の名作『ニュー・シネマ・パラダイス』(88年)、『シネマ13』340頁)を何度も観ているうえ、小学生時代には自宅の幻灯機で映写を経験し、中学生以降はオープンリールの録音機を愛用していた私には、その姿形がハッキリわかる。そのフィルムには「ニュース映画22号」と書かれていたが、なぜこのフィルムを巡ってこのご両人が争奪戦を繰り広げているの?

近時の邦画は1から10まで説明してしまうものが多い。他方、去る5月19日に観た『インフル病みのペトロフ家』(21年)等の一部の問題作は説明が極端に少ないから、監督の狙いや物語がさっぱりわからない。それに比べれば、『紅いコーリャン』(87年)、『シネマ5』72頁)以降、そのほとんどすべての作品を観ているチャン・イーモウ監督作品は、説明が多すぎず、少なすぎず、そのバランスが絶妙だ。また、ストーリー展開も見どころ、泣かせどころの急所をうまく押さえながら少しずつ見せてくれるので、飽きることなくスクリーン上に集中することができる。

しかして、この中年男は一体誰?また、少し後に女の子だとわかるこの薄汚れた子供は一体ナニ?そして、この2人はなぜこのニュース映画フィルムの奪い合いをしているの?

## ■汚れ役の“イーモウ・ガール”は如何に?■

『紅いコーリャン』(87年)のコン・リーと、『初恋のきた道』(00年)のチャン・ツ

イーはチャン・イーモウが発掘した二大女優だが、彼はその他にも『至福のとき』（02年）（『シネマ5』199頁）のドン・ジエ、『あの子を探して』（99年）（『シネマ5』188頁）のウェイ・ミンジ、『サンザシの樹の下で』（10年）（『シネマ27』108頁、『シネマ34』204頁）のチョウ・ドンユイ等を発掘し、次々と大女優に押し上げている。そのため、彼女たちは“イーモウ・ガール”と呼ばれている。

『狙撃手』は男ばかりの戦争映画だったから、“イーモウ・ガール”は登場しなかったが、本作で“イーモウ・ガール”として登場するのが「リウの娘」役を演じたリウ・ハオツン。『初恋のきた道』（99年）でデビューしたチャン・ツイイーは赤い服とおさげ髪の可憐な姿が印象的で、男なら誰でも一目でその虜になった。それに比べれば、本作のリン・ハオツンはラストの数分間を除く99%は薄汚れた少年まがいの役で登場するので少しかわいそう。

導入部のフィルムの争奪戦で、ご両人はさまざまな追いかけ合い、騙し合いを展開するが、その勝者は結局“リウの娘”になる。しかし、リウの娘が女の子であることがわかるのはずっと後のことだから、それを含めて、私たちは本作導入部のフィルム争奪戦をしっかり楽しみたい。

## ■□■なぜ強制労働所から逃亡？逃亡者は悪質分子？■□■

チャン・イーモウ監督と深い縁を持つ日本の俳優、高倉健はヤクザ役（任侠役）が最も似合うが、その次に似合うのが逃亡者役。中国で大人気になった『君よ憤怒の河を渉れ』（76年）（『シネマ18』100頁）でも、『新幹線大爆破』（75年）でも、彼には逃亡者の役がピッタリだった。

なぜここにそんなことを書くのかというと、本作で名前すら与えられず、「逃亡者」と表示される中年男は、1966年から77年まで続いた中国の文化大革命当時存在していた強制労働所からの逃亡者だからだ。1963年から67年まで放送された米国発の人気TVドラマ『逃亡者』（63年）では、妻殺しの容疑を着せられ、死刑宣告を受けた主人公が逃亡者になったのは真犯人を捜し求めるためだったが、本作の中年男が逃亡者になったのは一体なぜ？冒頭のフィルム争奪戦からストーリーが進むにつれて、彼がなぜ逃亡者になってまでニュース映画22号のフィルムにこだわっているのかが少しずつ明らかになっていくが、その理由は、そのニュース映画の中に長い間会えなかった彼の娘の顔が一瞬映っているためだ。

「造反有理」を唱えて毛沢東が指導した文化大革命では、毛沢東語録と紅衛兵が有名になったが、右派や修正主義者、そして造反者は直ちに“悪質分子”として処断され、強制労働所に送られていた。すると、その強制労働所からの逃走者は、当然、悪質分子……？

## ■□■映画上映は村の大イベント！ああ、それなのに……■□■

今でこそ映画館は総入れ替え制や座席指定制が常識だが、1950～60年代に小中学生の私が映画館に通っていた当時は全く違っていた。すなわち、「昭和のニュース」で見る

通り、当時は途中入退場や立ち見は当たり前、丸1日座り込んだまま何度も観る観客もいたほどだ。

他方、1968～77年の文化大革命当時の中国では、映画は村の最大の娯楽だったから、映画の上映会は村全体のイベント。そのことは、中国西北部の田舎町、寧夏の野外映画館での上映会を温かく描いた『玲玲の電影日記』（04年）（『シネマ17』386頁）等を見れば明らかだ。

しかして、夕方から「英雄儿女」と「ニュース映画22号」の上映が予定されている、本作中盤以降の舞台となる小さな村の映画館周辺の熱気もすごい。ところが今、ファン電影（ファン・ウェイ）が烈火のごとく怒り、息子を怒鳴りまくっているのは、彼が荷台に積んでいたフィルムの缶を落下させ、膨大な量のフィルムが剥き出し状態のまま地面にばらまかれていたためだ。その中には、逃亡者が血眼で探していたニュース映画22号の缶もあった。荷車の周りに集まった村人に対し、ファン電影は「こんな状態では上映は不可能。」「今日の上映会は中止！」と宣言したが、続いて彼はパニックに陥った村人に対して、「上映会を可能にする方法が1つだけある」と説明。さあ、“ファン電影”として日頃から村人の尊敬を一心に集めている彼は、そこでどんな説明を・・・？

### ■□■映画上映のため、2人の中年男はどんな協力を？■□■

ファン電影の提案はフィルムの洗浄による再利用だが、こんなに大量の泥まみれになったフィルムに、それが本当に可能な？『ニュー・シネマ・パラダイス』では、フィルムは可燃性が強いので、ちょっとしたミスで燃え始めると大変なことになることを学んだが、1978年に再開された北京電影学院の撮影科に入学し、4年間学んだチャン・イーモウは、当然フィルムの神様だから、その分身とも言える（？）本作のファン電影ならそれはチョロいもの。と言っても、そこは人海戦術の得意な中国らしく、彼の指揮命令の下、村人たちが一糸乱れぬ集団行動でお手伝いすることになるので、それに注目！

そこで意外だったのは、逃亡者もフィルムのことを少しかじっていたこと。そのため、長い時間をかけてフィルムの洗浄、再生作業に従事する中で、2人の中年男の“身の上話”も盛り上がることに。ニュース映画22号には本当に逃亡者の娘の顔が映っているの？それならそれで上映してやりたいのは山々だが、この中年男が強制労働所からの逃亡者だと分かれば、何よりもまず、俺は当局にそれを通報しなければ！村の次の電影（撮影者）に俺が続いて推薦されるためにも、ここでいい成績を挙げておかないとちや！

スクリーン上には映画上映のため2人の中年男が協力し合う姿が映し出されるが、多分それは表向きだけ・・・？

### ■□■リウの娘はなぜ泥棒を？なぜ弟と2人暮らしを？■□■

導入部の“フィルム争奪戦”で見せる、逃亡者とリウの娘との、追いつ追われつの肉弾戦も面白いが、砂漠の中を偶然通りかかった車に拾われて、囚らずも逃亡者に捕まえられ

る形になってしまったリウの娘の“弁解話”も面白い。なぜリウの娘はフィルム窃盗にこだわっているの？それは、幼い弟と2人で住んでいる彼女が、勉強好きの弟のために電気スタンド用にフィルムで新しい傘を作ってやるためらしい。なるほど、なるほど。しかし、涙ぐましいその話は本当の話し？ひょっとして、とっさにリウの娘がでっち上げた話しかも・・・？

偶然2人を乗せて車を運転していた男は、リウの娘からそんな話を聞かされた上で、「この男が“私のひどい父親”だ」と聞かされると、単純にそれを信じ込み、逃亡者を砂漠に置き去りにしてしまったから、“知能戦”では完全にリウの娘の勝ちだ。

しかして、今日の夕方から上映会が行われるという村で、ファン電影とともにフィルムの洗浄、再生作業に従事している逃亡者は、今は幼い弟と2人で住んでいるというリウの娘の真相を知ることができたから、これにて逃亡者とリウの娘の和解も成立。以降は協力して上映会の開催へ。一方ではそんな筋書きも予想されたが、さて現実は何・・・？

### ■□■『英雄儿女』に感動！逃亡者の娘は連続上映で何度も！■□■

日中戦争時代の中国では、多くの反日国作映画が作られた。それは太平洋戦争時代の日本で、多くの反米国作映画が作られたのと同じだ。しかして、今日この村で上映される『英雄儿女』は『南征北戦』以上の大人気だ。たしかに、“劇中劇”として上映されるそれは私が見ても感動的で、大いに涙を誘い勇気を鼓舞するものだから、村人たちがこれに熱狂し、感動するのは当然だ。しかし、それと同時に上映されるはずのニュース映画22号のフィルムはどこに？その所在を巡って再び逃亡者とリウの娘の間でいざこざが起きたが、それは逃亡者の誤解によるもので、フィルムはちゃんとリウの娘が映写室に届けていたから、逃亡者は一安心。食い入るようにニュース映画22号を見る逃亡者の目の中に一目だけでも会いたいと思う娘の姿は飛び込んでくるの？ひょっとして、一瞬スクリーン上に登場した、あの肉体労働に従事している健気な女の子が逃亡者の娘？

上映会が終わり、感動冷めやらぬ中、会場を埋め尽くした村人たちは次々と出て行ったから、ファン電影は逃亡者の要望に応じてニュース映画22号を再度上映することに。しかし、逃亡者の娘が映るのは、本作のタイトル通り「1秒間（一秒鐘）」だけだから、そこだけを何度も見るにはどうすればいいの？そこで発揮されたのが、ファン電影しかできないという連続上映の技術だ。それによって何度も映し出される娘の姿に逃亡者は何度も感動していたが、1人映写室を抜け出したファン電影は、あらかじめ連絡していた官憲たちを招き入れ、逃亡者の逮捕を要請したから、こりゃヤバいことに・・・。

### ■□■それから2年後、2人の再会は？邦題の意味は？■□■

ファン電影が官憲を呼んだことの是非は、本作を鑑賞する中で各自がじっくり考えたいが、ストーリー構成としてはやむを得ない。しかして、砂漠の中を連行されていく逃亡者を遠くから見守るのが、今は固い絆で結ばれたリウの娘だ。逃亡者を連行する官憲たちに情け容赦がないのは当然だから、逃亡者が大切に隠し持っていたフィルムの切れ端を見つ

けると・・・？これは、こちらは今や固い絆で結ばれたファン電影が、逃亡者のために娘の写っている2片のフィルム（＝24フレーム）を切り取って渡してくれたものだ。逃亡者は新聞紙に包まれたそれを大切に保管していたが、官憲たちは情け容赦なく砂漠に捨ててしまうことに。しかし、それを遠くから見ていたリウの娘が素早くそこに駆けつけ、砂漠の中に埋もれようとしていた新聞紙を発見したから、大切にこれを保管。いつか逃亡者が戻ってきたら、必ずこれを渡さなければ！逃亡者にとって本当に大切なものは新聞紙ではなく“永遠の24フレーム”だったが、逃亡者と官憲とのやり取りを遠くから見ていただけのリウの娘に、それはわかるはずはなかった。

しかして、本作ラストはそれから2年後。強制労働所から再び村に戻ってきた逃亡者を、今は少し娘らしく成長したリウの娘が笑顔で迎えたのは当然。大切に保管していたあの新聞紙をリウの娘から受け取った逃亡者は本当に嬉しそうだ。しかし、その新聞紙をめくってみても、その中には何も・・・。

さあ、無駄とは知りつつ、2人は再びあの砂漠に駆けつけたが、そこに“永遠の24フレーム”はあるの？それはいくらなんでも無理だろう。そんな中で迎える感動的なラストは、あなたの目でしっかりと。

2022（令和4）年5月27日記